

「生命の教育」創始者 谷口雅春先生 今月の言葉

子供の善性を言葉によって引き出そう

言葉は不思議な力をもっている

心で想うとおりに姿形となってあらわれる

言葉というものは不思議な力を持ったものです。「あなたは温順おとなしい良い子ですね」と言いますと、その子供は温順おとなしくなります。「この子は悪戯いたずらツ子こで仕方がない子ですよ」と言いますと、その子供はますます悪戯いたずらツ子こになります。これを言葉の力と申します。言葉というのは、それを聴く人の心に、その言葉のとおり的心を流し込む役目をするのです。

（光明思想社版『人生読本』315頁）

吾々われわれの心の中は「花園」や「花島はなぼたけ」みたいなものでありまして、そこに、どんな種たねでも蒔まくことが出来るのであります。心の花園に蒔く種は「思い」と云う種であります。心に何を「想う」かと云うことが心の花園に蒔く種を定めることになるのであります。（中略）「あの人は悪い人だから嫌いだ」と心で想いますと、「あの人が悪い人になってあらわれて来ます。「あの人は神の子だから屹度きつと善い人だ。私は好きだ」と思っていますと、

その人は、屹度、あなたに深切な善い人になってあらわれてまいります。
(新装新版『真理』第1巻141頁)

善い言葉が善い運命を造り出す

まず自分に対して「私は神の子だ。何でも素晴しく出来る。私の運は必ずよい、神様が護っていて下さるのだもの」と、朝目がさめたとき自分の耳にきこえる声で自分自身に二十遍ずつ呼びかけなさい。これが「言葉の力」と云う法則を使う第一歩であります。それから起上がったら、顔を洗うにしても、ほこり叩きで払うにしても、箒ではき浄めるにしても、その間じゅう、顔を洗う水に、塵をはらうハタキに、座敷を掃く箒に……その他、何にむかってでも「有難うございます」と口のうちで感謝の言葉をとなえるのです。あらゆる物に感謝の言葉をとなえますと、それがすべての物を祝福する言葉になり、自分が祝福されることになるのです。これが「言葉の力」を使う第二歩となるのです。水は川に流れてい

ても、その水を漕がないと船は動かないのです。言葉の力が宇宙にみちみちていて、万物をつくっていても、貴方が、「言葉の力」で善い言葉をとなえないと、「善いもの」は出て来ないのです。

(新装新版『真理』第3巻112～113頁)

子供の姿は親の言葉のあらわれ

実験心理学の実験に於て、皆さんの前に一様に水を入れたコップを入れておいて私が水を飲めば、皆さんもその通りに水を飲まれる。それと同じく親が心に怒れば、その通り子供の形に現れて来るのです。これを児童の模倣性と申しております。親が夫婦喧嘩をしているのを子供の時に見せておくと、子供が成人して大人になると同じように夫婦喧嘩をするようになります。子供を叱る場合などでも、皆さん反省して御覧になれば、きっと、自分が子供の時、親から叱られた通りの言葉をいって子供を叱りつけている事実、みずから愕然として

驚く事があるのであります。それは知らず識らずの中に心の中に蓄積された観念が、長い年月を経ても失われずに現れて来るのであります。そう考えると、何事でも悪い手本は迂濶には見せられないと思わせられるのであります。

(新編『生命の實相』第22巻44頁)

子供の「本当の自分」を引き出す言葉を

人間の本性の尊いこと、その潜在能力の無限であることを子供の心に吹き込むようにすれば好いのである。すると、子供は次第に「本当の自分」が如何に崇高く靈妙なものであるかを知りはじめる。そしてその「本当の自分」を実現することが彼の生涯の理想となり、従来の小さな虚栄や、小成に安んずる慢心や、狡い利己心は消滅して、本当に彼は謙虚な心持で生長の本道を辿り得ることになるであろう。(中略)

「下手だ」とか「悪い」とかいつて叱りつけて、児童の心に自己の悪い方面を印象せしめるような旧式の教育法

は断然改めなければならないのである。といつて、下手のまま「これで善い」と慢心せしめるような教育法も失敗だといわなければならぬのである。「非常に上手に出来たが、ここをもう少ししたら一層出来ばえがよくなるだろう。それ御覧、こうなるだろう。今度はここをもう少し注意してやって御覧なさい。きつとまだまだ上手になる。この子は少しでも善くないところはすぐ改める子だから、どれだけでも上手になる子だ。将来どれだけ天才になるか、私はお前を楽しみにしているのだ」こういうふうな言葉を使つて、善くないところを改善することに喜びを見出すような誘導法を用いるのが最も好いのである。常に子供を批評するときには、確定的な言葉で、彼の将来を祝福してやり、子供の到達に親たちが望みをかけており、彼が到達することが真に親たちの喜びであることを、ハッキリと彼の心に感じられるようにしてやるが好いのである。

(新編『生命の實相』第22巻161～163頁)